

詩篇115篇

《在天なる神の栄光》

- 1 私たちにではなく、主よ、私たちにではなく、あなたの恵みとまことのために、栄光を、ただあなたの御名にのみ帰してください。
- 2 なぜ、国々は言うのか。「彼らの神は、いったいどこにいるのか」と。
- 3 私たちの神は、天におられ、その望むところをことごとく行われる。

《無力なる偶像》

- 4 彼らの偶像は銀や金で、人の手のわざである。
- 5 口があっても語れず、目があっても見えない。
- 6 耳があっても聞こえず、鼻があってもかげない。
- 7 手があってもさわれず、足があっても歩けない。のどがあっても声をたてることもできない。
- 8 これを造る者も、これに信頼する者もみな、これと同じである。

《主に信頼せよ》

- 9 イスラエルよ。主に信頼せよ。この方こそ、彼らの助け、また盾である。
- 10 アロンの家よ。主に信頼せよ。この方こそ、彼らの助け、また盾である。
- 11 主を恐れる者たちよ。主に信頼せよ。この方こそ、彼らの助け、また盾である。

《祝福を賜わる主》

- 12 主はわれらを御心に留められた。主は祝福してくださる。イスラエルの家を祝福し、アロンの家を祝福し、
- 13 主を恐れる者を祝福してくださる。小さな者も、大いなる者も。
- 14 主があなたがたをふやしてくださるように。あなたがたと、あなたがたの子孫とを。
- 15 あなたがたが主によって祝福されるように。主は、天と地を造られた方である。

《とこしえの賛美》

- 16 天は、主の天である。しかし、地は、人の子らに与えられた。
- 17 死人は主をほめたたえることがない。沈黙へ下る者もそうだ。
- 18 しかし、私たちは、今よりとこしえまで、主をほめたたえよう。ハレルヤ。

1～3節

ハレルヤ詩篇集の第五は、「私たちにではなく、主よ、私たちにではなく、あなたの恵みとまことのために、栄光を、ただあなたの御名にのみ帰してください」という爽やかな叫びとともに始まります。これまで詩人は、何らかの理由で異邦の民から嘲笑を受けてきたのでしょうか。「彼

らの神は、いったいどこにいるのか」という皮肉のこもった言い草は、詩人自身を嘲られるよりも耐えがたいことでした。子どもの頃に経験したことがあるかもしれません。親がバカにされることは幼い心を深く傷つけるものです。同様に、いやそれ以上に、自分が信じている神をけなされるのはまことに許しがたいことであります。この詩篇が書かれた時代、国の状況が芳しくなかったり、戦争に敗北したりすると、「お前たちは神に見放されたのではないのか？」と言って嘲られたそうです。当事者はただでさえ屈辱を味わっているというのに、傷口に塩を塗られるかのように信仰までも否定される。そのような辛酸を舐めた詩人の置かれた状況とは、バビロン捕囚を経験していた時だったのではないかと考えられています。「どうした、貴様らを助けてくれる神はいないのか」と何年も罵られてきたのかかもしれません。しかし、本篇の冒頭が力強い賛美で始まっているということは、そのような状況をひっくり返す出来事が起きたからでしょう。主は民の祈りを聞き、永遠とも思われた拘束から解放し、祖国へと道を切り拓いてくださったのです。

4～8 節

詩人は逆に、異邦の民が頼る偶像の価値を問います。「銀や金」とは、木で彫られた像の上に被せるもの、いわゆる「金箔」「銀箔」です。それらは剥がそうと思えば剥がせるではないか。人の手で作られたものではないか。彫刻家は細工を凝らして像の形を見事に彫り上げるが、あたかも人間のように「口」「目」「耳」「鼻」「手」「足」「のど」があったとしても、それらは微動だにしない。なぜなら命がないからである。そのように、イスラエルの生ける神と偶像とを決定的に比較するのです。創造主なる神は確かに生きて働いておられ、祈りを聞き、時至ってその祈りに応えてくださる。神はペルソナなる存在なのだ。

9～11 節

詩人は思い出したように、民に主を信頼するよう訴えかけます。「主に信頼せよ。この方こそ、彼らの助け、また盾である」と。この呼びかけのことばは、「イスラエル」「アロンの家」「主を恐れる者たち」に対して語られています。いずれも同じ事柄の言い換えでしょう。「アロンの家」と言われるとき、イスラエルの民は自分たちを祭司的民族と認識したと思われます。これは特別な「祭司職」に就いている者に留まらず、民全体が異邦人に対してそのような役割に召されていることを言い表しています。この思想と特権はペテロの手紙で受け継がれることになりますが（Ⅰペテロ 2:5）、そこでは信者一人ひとりに対して「聖なる祭司、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげよ」と勧められています。

12～15 節

ここでは「祝福する／祝福される」が5回も繰り返されていますが、捕囚で苦しんできた民が再び繁栄を取り戻すことを物語っているのでしょう。ここでも先の「イスラエル」「アロンの家」「主を恐れる者たち」が反復されており、祭司的王国としてイスラエルが祝福を受け、アブラハムに対して語られた神の約束が成就していくことを伝えていると思われます。「さ

あ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。」さらに仰せられた。「あなたの子孫はこのようになる」(創世 15:5)。量的に「増える」ことは、神からの祝福の一側面と考えられていました。そして、その祝福は「主を信頼する者」に与えられると約束されています。

16～18 節

ここでは、天も地も「主のもの」であることが強調されています。人はこの世に「生み落とされ」、何一つ自分で持って来たものではありません。主が与えてくださった「地」で精一杯生き、被造世界の管理者としての責任を果たそうとしている(創世 1:26-28)。しかし、その責任を真に果たすためには礼拝生活が不可欠なのです。礼拝がなければ、人の業は罪と欲望によってどこまでも的の外れた道へと突き進んで行くことになるでしょう。

「死人は主をほめたたえることがない」という表現が気になりますが、これは旧約の民が死後の世界に基本的に希望を見出していなかったか、あるいはまだ「死者の復活」の教理がしっかりと確立していなかったところから出てきた言説でしょう。だから、彼らは「現在」に集中したのです。死後「陰府」に下るのであれば、賛美ができるのは今しかない。その認識に立って、「きょう」という日を大切にしましたのです。私たちも明日という日はないと思って賛美をささげる人生を歩んでみてはどうでしょうか。今をどう生きるかということに集中し、いつ地上の命が取り去られたとしても悔いのない礼拝の人生を歩み抜きたいと思えます。

しかし、私たちは、今よりとこしえまで、主をほめたたえよう。ハレルヤ。(18 節)